

驚いた話

牧野信一

青空文庫

去年の冬であつた。私は非常に憂鬱であつた。身も世もなく憂鬱であつた。真夜中に至るに伴れて私のそれは私の魂をも奪つた。私は、何うする事も出来なくなつて、床の間に人型を作つて飾つてある鎧を身につけ、面当を被り、冑も執つて、真夜中の床の間に幾時間も凝つと模型になつてゐることがあつた。そして吾身の、此世に在ることを、せめても忘れたかつた。――

その夜も私は灯火を消して、框に掛けた鎧の中に凝つとこの身を閉ぢ込んで、怖ろしい無念無想に沈湎してゐた。

何時の間にか私は、街道に迷ひ出てゐた。静かな闇の夜であつた。冑が、深く鼻まで覆ふほどで、闇夜でなくとも、私の眼の先

は殆んど真ツ暗であつた。私は、面あての口腔から外を見れば見る——それほど、それは私の身に不釣合であつたので、一層私は殆んど目を瞑つて、よたよたと歩いてゐた。たしかにこの方法は、頑固な私の憂鬱を想外のものとするべき奇妙な効果があつた。

不図私は、私の身近かに、

「ギヤアーツ！」といふ、おそらく嘗て地上では聞いた験しのない物凄い叫声に打たれた。同時に私も爆弾のやうに仰天して、

「ギヤアーツ！」（？）といふ悲鳴を挙げた——私は、何うして自分の部屋にとつて返したか覚えはなかつた。

（私は、斯んな突飛な驚きを経験したことはない。）

翌晩私は、素面の夜は決して堪へられぬので、泥酔すべき覚悟

をきめて村境ひの居酒屋に向くと、酒場の隅で次のやうな話に花が咲いてゐた。（その一節。）

「仁王門を抜けて行くと、あの銀杏の傍らに、ぬうつと烏天狗が立つてゐるんだ。よくく見とゞけてやらうと思つて、近寄ると、ふつと、もう姿は消えてゐたといふことだが——」

「まさか、烏天狗ぢやあるまい。誰かの悪戯に違ひないさ。」

「あの人が此処を出たのが一時頃だつたから、恰度丑満時だらう。今夜も出るかも知れないから、皆なで正体を見とゞけに行かうではないか。」

そして私もその一行と（誰も一人では歸りたがらなかつたので、）歸路を共にして仁王門を通り過ぎたが、鎮守の森にさしかゝ

ると一同は水に浸つたかの如く寂としてしまひ、森を出ると誰かゞ「ワツ！」と叫ぶや、てんでに蜘蛛の子を散らすやうに飛び散つてしまつた。無論私も先頭に――。

その時云ひそびれたので、後になつて私は、あの晩の自分のことを説明したのだが、何故か誰もそれを信じなかつた。そして夜になると仁王門の傍らを独りで通るのを皆な嫌がつた――私も――。

青空文庫情報

底本：「牧野信一全集第四卷」筑摩書房

2002（平成14）年6月20日初版第1刷発行

底本の親本：「文學時代 第三卷第二号（二月号）」新潮社

1931（昭和6）年2月1日発行

初出：「文學時代 第三卷第二号（二月号）」新潮社

1931（昭和6）年2月1日発行

入力：宮元淳一

校正：門田裕志

2011年8月1日作成

2016年5月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

驚いた話

牧野信一

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>